

日仏の柔道観に関する「相違」と日本柔道への「リスペクト」 ：2019 モンペリエ講習会から考察する

濱田初幸*

The French View of Judo and Their Respect for Japanese Judo: A Study Based on the 2019 Stage International de Judo Montpellier

Hatsuyuki HAMADA*

Abstract :

The author was invited to the 2019 Stage International de Judo Montpellier in July 2019, and he conducted Q & A (Mondo) sessions to the participants for a week. The author realized again that overseas judoka (judo practitioners) admire Japanese judo greatly and they expect a lot from Japanese judo.

Japanese judo has been criticized for being shaky amid globalization. However, its history, skills, and achievements of Judo forerunners, which have been passed on to the current Japanese judo practitioners, are disseminated and accepted as exemplars and it is firmly established culture in the world. Also, its foundations are solid. To maintain and develop overseas judoka's strong sense of trust in Japanese judo, it is necessary to teach judo by putting a value on the inheritance of culture and tradition in Japan.

However, as French judoka pointed out in judo seminars, that issues, such as the way to coach children, the fact that little attention is paid to Kata, and the need to foster coaches who are good at both academics and sports, have to be solved.

There are plenty of problems to solve and various points to need to be improved regarding coaching judo abroad. However, we have to consider Jigoro Kano's vision on judo, pursuance of judo to become judoka, who holds the pride of Japanese culture and have the courage to solve difficult issues in a globalized society, such as cultural friction, promoting Japanese judo throughout the world. It is a mission of the judo world in Japan to show global leadership through judo, a form of physical art created by Japanese, and contribute to the current globalized world.

Keywords: Judo, the way to coach judo abroad, the inheritance of culture, and human resources development

和文要約 :

2019年7月「STAGE INTERNATIONNAL DE JUDO MONTPELLIER (モンペリエ国際講習会)」に招待され、7日間に渡って参加者を対象に問答(質疑応答)や対話を行った。海外柔道家たちの日本柔道への強い憧れ、期待の強さを改めて認識させられた。

国際化の波に揺らぐ日本柔道との厳しい批判も聞こえてくるが、先人が遺した日本柔道の歴史と技、功績は世界の範として、確固たる文化として伝播・受容され、基盤に揺るぎはない。諸外国の柔道家が抱く日本柔道への強い信頼感を持続、継続させていくためには、日本の伝統文化の継承に価値を置いた取り組みが必要である。

一方、フランス柔道家から指摘された講習会等での提言や子供の指導法、「形」軽視への課題、文武両

* 鹿屋体育大学スポーツ・武道実践科学系

道を兼備した指導者の育成など、改善工夫を求めている知見も浮き彫りになった。

海外指導での問題点や課題は尽きないが、嘉納が目指した柔道は日本人としての誇りを固持し、その魅力を発信しようと国際社会の文化摩擦や課題・難問に果敢に挑戦する柔道家の輩出であったことを忘れてはならない。日本人により創出された身体運動文化である柔道を通じて、グローバルリーダーシップを発揮し、国際社会に貢献することは日本柔道界の使命である。

キーワード：柔道, 海外指導法, 文化の継承, 人材育成

1 はじめに

2020東京五輪でも多くの金メダル獲得が期待される柔道競技だが、昨今の国際大会における熾烈な戦いを鑑みると予断を許さない状況にある。一般論として日本人柔道選手はパワーでは劣り、そこを技術で補い勝ちを得る（正木, 2019）と言われてきた。しかしながら、海外選手の実力が予想以上に向上し、技術面の進歩が顕著となったことから、国際競技力のレベル向上が急浮上（石井, 山下, 2019）し、日本と強豪国間の実力差はあまり無いと考えている。

柔道は現在202の国・地域に普及（上村, 2019）し、五輪でのメダル争いは激化しているが、中でも柔道大国と言われるフランス（以下、仏）（高木, 2010）は、日本にとって最大のライバルになると予測している。

柔道が正式採択された東京五輪（1964年）以来、日本柔道界は通算39個の金メダルを獲得（柏山ら, 2019）しているが、仏も13個を獲得しており、創始国・日本を追随している。また、男子100kg超級のロンドン・リオ五輪の金メダリスト・世界選手権8連覇のテディ・リネールを輩出するなど、フランス柔道連盟（以下、FFJDA）の選手強化育成体制が奏功していることが窺える。選手の強化のみならず、国家レベルにおける指導者資格の制度化（濱田・CADOT, 2015）、小学校への柔道導入（選択制）、知的障がい者柔道療育の確立（濱田 Lévesque, 2017）など、柔道環境が整備・充実していることから「柔道成熟国・仏」と呼称されている。

2018年度のFFJDAの登録人口は、約57万人で

世界屈指の柔道人口を有している。また、柔道教育の有効性が広く国民に浸透していることから、青少年（17歳以下）の登録率が全体の75%を占め（溝口, 2015）、国内競技別登録人口でも5番目にランクされている（FFJDA, 2019）。一方、日本の登録人口は14万人（池田, 2020）を割り、18歳以下の登録率も約60%（全日本柔道連盟, 2018）とFFJDAとは大きな差異が見られる。国毎で登録制度や統計手法が異なり単純に比較することはできないが、日本の柔道人口は減少傾向（鈴木, 2019）にあり、国内での認知度は仏ほど高くはない。仏人柔道家が「日本における柔道は近くにあり過ぎて価値がわからないのでは」（山口, 2013）と述べているが、筆者は早急に斬新で効果的な普及策を講じなければ、柔道の魅力が国民に伝わらないまま、柔道人気は下降の一途を辿るのではないかと懸念している。

筆者は仏南部に位置するオクシタニー地域圏、エロー県・モンペリエで開催された「2019 STAGE INTERNATIONAL DE JUDO MONTPELLIER」に招聘され、柔道指導の機会に恵まれた。柔道を愛する外国人柔道家たちからの聞き取り調査や対話を通じて、また現場視察から新たな知見を得ることができた。

欧州圏域で開催される柔道講習会の特徴の一つに、「MONDO・問答」^{*1}（柔道大辞典, 1999）を導入していることが挙げられる。稽古終了後や夕食時から、日仏の指導法や各国柔道界の実態、文化、慣習など様々な文物に関する情報交換、違いについて論じ合う「問答」が習慣化され、今回も連日深夜に及ぶ議論が続いた。柔道の稽古や技の

研究も有意義だが、この「問答」が好きで、25年以上に渡って本講習会に参加している古老の柔道家もいた。

井上（2004）は「武道の内、国際化が最も早く進んだ柔道の場合、グローバルな発展に連れて『本家』としての日本のリーダーシップが相対的に低下していくなかで一種の『文化摩擦』が生じている」と指摘する。本講習会においても、日本との「相違」が興味深く鋭い視点で海外柔道家たちから語られた一方で、柔道の魅力や日本人柔道家へのリスペクト発言も再三聞くことができた。

今回は35周年記念特別企画としてシンポジウムが開催され、パネリストを拜命した。本講習会から、グローバル化の中で海外柔道家たちが日本人柔道家に求めているものは何か、我々があまりに伝統に固執していることから生じる過誤はないか、柔道の原点を喪失していないかなど、現地にて実施した聞き取り調査や対話などから、選手育成方法や柔道を通じての教育観、柔道文化の捉え方など、見えてきた実態と課題を抽出し考察を試みた。

本論はグローバル化が進む柔道界の発展に寄与するとともに、海外指導を志す日本人柔道家への一助とならんことを目的とする。

2 調査場所・講習会日程

- 企画運営統括責任者：パトリック・ルー
- 参加国・地域：仏、ドイツ、スイス、ベルギー、スペイン、ギリシャ、カナダ、アメリカ、イギリス、ウェールズ・スコットランド、コートジボワール
12ヵ国・地域から202名（12歳から80歳まで、内女性35名）
- 聞き取り調査者数：参加者の内約30名（20歳から78歳まで、内女性4名）
- 調査場所：
Palais des Sports Pierre De Coubertin
HELIOTEL, Hôtel de Ville de Montpellier
- 日程：2019年7月15日－19日

● 主な質問事項（インタビュー調査）：

- ① 日本柔道と仏柔道の違い
- ② 柔道と教育の関係
- ③ 仏の初心者指導法について
- ④ 打ち込み・形に関する指導法等
- ⑤ 日本柔道への期待観

尚、通訳は嘉納治五郎師範研究者として世界的権威の一人とされる、トゥールーズ・ジャン・ジョレス大学准教授・仏柔道連盟（以下、FFJDA）アカデミー委員で柔道六段のイヴ・カド（以下、カド）に依頼した。

3 調査結果及び考察

1) 講習会の概要

本講習会は、老若男女を問わず、4大陸12ヵ国・地域の多種多様な柔道愛好家約200名が参加する国際色豊かな特徴が見られた。参加者の実力差は著しく、リオ五輪女子78kg級銀メダリストのオドレー・チュメオなど世界で活躍している強豪選手から経験の浅い無段者、さらには80歳を超える高齢の柔道家など多様性に満ちた講習会であった。

プログラムは午前と午後、各2時間30分、内容は招聘講師の技解説、90分、乱取50分（5分×10本）であった。

欧州圏からの参加が多いのは想定していたが、30名を超える北米カナダからの参加やアフリカ西部・コートジボワールからのエントリーは予想外であり、柔道のグローバル化が進展していることが示唆された。

日本では極端な競技レベル・実力差が異なる柔道家が、一堂に集う講習会は大方存在しない。小学生、中学生、高校生などの同年代、同レベルによる講習会は頻繁に実施されているが、年齢や実力差が著しく異なる合宿や複数国が集う合宿は稀である。欧州各国ではこの種の講習会が日常的に各地で開催され、主催者の一人は「多国籍の柔道家、異質な選手層や幅広い年齢層が混在する集団の中で、グローバル教育、コミュニケーション能

力の育成, 多様性の理解など人間力の成長に資する汎用性が高い講習会になっている」と講習会の意義を論じたが, その趣旨を十分に理解することができた。

参加費は約5万円超と日本の講習会と比べると高額に思えるが, 欧州圏には柔道への投資を惜しまない文化があり, それ故に, 参加者同士の交流や新たな出会いを大切にしている光景が見られた。夕食時からの参加者の行動を観察していると, 誰もが各々のグループに溶け込んでいて, 笑顔にあふれた積極的な会話が至る所で交わされ, 生き生きとした様相が窺え, 本講習会が途絶えることなく30年以上の長期に渡り毎年開催されている理由を知ることができた。仏柔道家を対象とした先行研究では, 柔道に対する楽しさ, 良好な教育感, 徳性の涵養に関するなどの感情が高い知見が報告されている(濱田ら, 2015)が, 本講習会においても柔道に対する肯定的な発言に接する多くの機会を得ることができた。

日本でも, 競技力の向上のみを目的とするのではなく, 幅広い柔道家が触れ合うコミュニケーション力を高める講習会の設立を待望する。老若男女を問わず, 実力差が顕著で異質な集団や, 健常者と障がい者などが合同で参加することができる, 多様性に富んだ講習会の開催である。障がい者柔道療育を推進する酒井(2016)は, グローバル化時代にあつて国籍, 人種や民族, 障がいの有無を超えた柔道講習会を開催することによって異文化理解, 寛容性を高める等の人間教育に視点を置いたインクルーシブな講習会が重視される傾向にあると述べ, 日本柔道の講習会の在り方に一石を投じている。酒井が提唱する新たな活動は, 国民や広く社会からの共感を得る可能性があり, その結果として柔道人口の普及や柔道文化受容に繋がることを期待する。

2) 講習会から見た仏柔道界の課題

これまでに外国人講師らと伴に国内外で指導してきた筆者の経験(濱田, 2012, 2013)から, 総じて日本人柔道家の技術は高度で, 諸外国の著名

な指導者らより秀逸であると捉えている。長谷川ら(1985)は, 投技を施技する直前の「抜重」と言われる体全体を脱力する技術は, 日本人柔道家独特の非常に高度な技法であると報告している。さらに先人らが「足技を制する者は世界を制する」(濱田, 2011)と指南してきたが, 「足技」の技術や「抜重」の極意は, 外国人にとっては極めて難度の高い技術であると筆者は捉えている。競技レベルの向上のみならず, 柔道の本質・極意を選手やクラブ生に伝授するためにも, これらの技術を修得することが外国人指導者の取り組むべき課題である。

中村(1984)は, 「外国人は日本人に期待し, 日本の柔道に対して, 求めているものは素晴らしい柔道の技であつて, 決して力でねじ伏せる柔道ではない」と述べており, 当に正鶴を得た指摘である。外国の柔道家から, 日本人の高度な技へのリスペクト発言を, 本講習会のみならずこれまでも幾度となく聞くことができた。因つて, 日本人柔道家は諸外国の指導者が修得困難な高度な技や, 先人が伝える正しい「技の理合い」^{※2}に基づいた技術の修得を怠ることなく, 一層探求し続け, その範を示さなければならない。そのためには, 日頃の練習の中で力に頼ることなく, 肩の力を抜き軽やかな動きの中で「技」を仕掛ける柔道を心掛けておく必要がある。また, 防御の際にも, 相手の技を真正面で受け止めるのではなく, 素早い「体捌き」で受け流す柔道技術の修得も求められる。パワー柔道が叫ばれる国際化の風潮にあつて, 世界に浸透している柔道技術の変容の波を断ち切ることは簡単ではないが, 柔道本来の理念である, 「柔能く剛を制する」(柔道大辞典編集委員会: 上掲書)のコンセプトは普遍的であると言明しておく。

近年, 世界的に「形」への関心が急速に高まつてきており(ソリドール, 2018: 藤堂, 村田, 2019), 講習会中にも居残つて「形稽古」に真剣に励む多くの柔道家を散見した。

日本では昇段審査合格に向けた形式的な「形稽

古」を見受ける機会はある（野瀬，2008）が、「形」を楽しんでいる柔道家をあまり知らない。海外では重要な稽古法として、日本人以上に「形稽古」に熱心に取り組んでいる柔道家を見受ける。2019年に講道館が主催した「形」の夏季講習会参加者610名中、外国人は346名と過半数を超えていた（鮫島，2019），との報告もあり，外国人柔道家の「形」に対する関心の高さを示している。柔道創始国である日本人が示範する「形」へのリスペクトが強いことから，「形」の認識度，修熟度の向上は日本柔道の喫緊の課題である。特に海外雄飛を志す日本人柔道家は，「形修行」を軽んじることなく，講道館7種の「形」*³全てに精通しておくことが求められる。

外国人柔道家の高度な技や「形」への関心が深まる一方で，柔道の歴史，武士や伝統芸能の成り立ち，『四書五経』に記される文言，武道の専門用語など古来より継承される文物，日本文化の学びなど，学術的な知識への興味・関心度の高まりも顕著である。海外指導を志す柔道家には，武道に関する幅広い学術的知識や日本の伝統文化への造詣や学びが求められていることから，日本の指導者は「文武両道」に秀でた人材育成に力を注がなければならない。

3) 日本柔道へのリスペクト

国際柔道連盟（以下，IJF）パリ総会（1997年）で，ブルー柔道衣導入が容認されてから22年が経過する（藤堂，2007）。国内でも普段の稽古中にブルー柔道衣を目にする機会が増えてきたが，本講習会でブルー柔道衣を着用していた参加者は一人としていなかった。ブルー柔道衣導入に強い影響をもたらしたのは，当時IJF理事で仏人のフランソワ・ベソンであった（藤堂・村田，上掲書）が，日本人が招聘される仏での講習会では，ブルー柔道衣を着用しないのが仏柔道界の慣習とされている。図1 2

柏崎（2008）はブルゴーニュの講習会で「ブルー柔道衣は，試合での誤審を防止するためのもの。日本の伝統を重んじ，白柔道衣を着るべきで



図1 開講式



図2 実技指導

ある」と主張した仏人の発言に衝撃を受けたと報告している。また野瀬（2018）は，近年IJFが白柔道衣を尊重する方針から，国際大会の表彰台では，白柔道衣着用を義務化していると報告している。白柔道衣を尊重する意向は日本の伝統に敬意を表し，柔道創始国に対するリスペクトの象徴と言えよう。

フランスでの実態と逆行するかのようには，日本においては，選手のみならず指導者までが，ブルー柔道衣を安易に着用して普段の練習や講習会等に参加している光景に遭遇した。学校教育現場では，教育基本法に謳われている，「伝統と文化の尊重」を大切にする教育活動（文部科学法令研究会 平成27年版，2015）が図られている中で，柔道指導者自らが「伝統と文化を断つ」ような不作法を行ってはならない。日本の伝統文化である柔道（村田，2011）を通じて，礼儀作法，所作，美德されると立ち居振る舞い・様式美・形式美を伝えることが指導者に求められる。柔道の伝統と文化を継承する意味合いからも，国際柔道連盟が

管轄する大会や特段の状況下でない限りは、公の場においては、本来の白柔道衣を着用するのが教育的観点からも重要なのではなかろうか。仏柔道家たちが見せた振る舞いを範とすべきである。

仏では柔道衣を「キモノ」と呼び、上述した問答は「モンドウ」と発音（濱田，2006）され、日本の伝統的な用語を尊重している（星野，2019）。同様に道場での履物を「ゾウリ」と呼び、講習会等の必携品としている。また、「ゾウリ」を揃える習慣も各地の道場で見受けられるようになった。FFJDA が全国に配布する子供向けのコードモラルを論じた漫画ポスターには、「畳に上がる時は『ゾウリ』を揃えるように」と描かれている（柏崎，上掲書）。

総じて、柔道に伝承される専門用語、礼儀作法、立ち居振舞いなど日本の伝統文化に対するリスペクトは年毎に強まる傾向にある。日本人柔道家は、伝統文化を尊重する気風を今一度再考し、「原点回帰」「脚下照顧」^{※4}の精神で柔道との向き合い方を考え直さなければならない。



図3 FFJDA 子供向けコードモラル

3) シンポジウムにおける問答

講習会の中日に当たる17日、モンペリエ市役所公会堂にてシンポジウムが開催された。

冒頭の市長挨拶に始まり、ヨーロッパ柔道連盟

（以下、EJU）副会長・ジェーン・ブリッジ，ロシア柔道連盟強化委員長・エツィオ・ガンバが祝辞を述べるなどIJFの要人が招待されていた。

シンポジウムは嘉納治五郎師範（以下，嘉納）が強調した「文武両道」（石田，1915；田中，藤堂ら，2001）をテーマとし、「文武両道」と漢字で書かれたのぼり旗と嘉納の等身大パネルが中央に備えられていた。基調講演・進行役はカドが担当した。



図4 モンペリエ市長とスタッフ

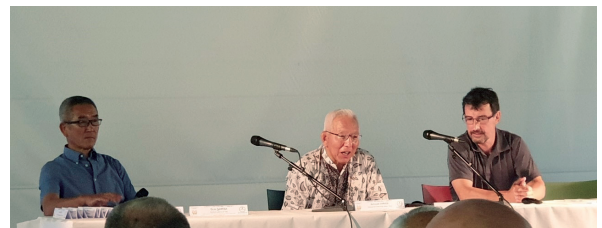


図5 シンポジウムパネリスト



図6 シンポジウムフロアー

カドは嘉納の首唱でもあり、日本人が大切にしてきた「文武両道」の精神（寒川，2014）を仏の青少年に説かなければならない、FFJDAにおいても「文武両道」を活動内容に取り入れた講習会が必要であると力説した。これからも、青少年の教育に有益な日本の良い言葉を学ぶことの重要性、さらに仏人柔道家は日本の格言、柔道・武道専門用語、特に精神性に触れた言葉に関心が高いことなどを述べた。

筆者は、基本練習の中でも日本人が最も大切にしている「打ち込み」の重要性（田中，藤堂ら，上掲書）を力説したが、フロアーからの質問で「打ち込み」を多くやらせると仏の子供は面白くないから道場に来なくなる、基本ばかりやらせて強くなるのか等の反論があり、「打ち込み」の重要性を理解させるまでには至らず、指導法の相違が浮き彫りになった。また「なぜ日本人は初心者に『背負投』から指導するのか」、「なぜ日本人は子供の指導に遊びを取り入れないのか」などの質問を受けた。

「打ち込み」に関する質問に対して、筆者は「同じ技を長年に渡って何本も何本も繰り返すことにより、技の正確性や「抜重」のコツを修得し、さらに単純な動作を繰り返すことにより、試合中の接戦の際に必要な忍耐性や勝負への執着心など強い精神力が養われ、体力的にも持久力などの強化に繋がる」ことを強調した。さらに「技の極意は『打ち込み』で身に付け、『打ち込み』によって、技は完成するのだ」と私見を述べた。

これまでに古賀稔彦・吉田英彦（バルセロナ）や瀧本誠（アテネ）、大野将平（リオデジャネイロ）の五輪金メダリストなど数々の名選手を輩出した、柔道エリート養成私塾・講道学舎（木村，2007）の道場の壁面中央には、次の至言が掲げられていた。

「腰だ 腰を入れる 跳ね上げろ。肩だ 肩を入れる 担ぎ上げろ。拳だ 突き上げろ 突き崩せ。打ち込み 打ち込みで技を磨け。」（一部抜粋）と、投技の要点と打ち込みの必要性を簡潔明瞭に大き

く力強い墨字で記してあった。彼らは1日千本の打ち込みを熟した（瀧本，2011）と言われている。

上述の「抜重」は、得意技の「打ち込み」を何千万、何万回と繰り返し、繰り返し積み重ねていくしか、その本質とも言えるコツを掴むことは至難ではないかと考える。単なる技の解説や書物の知識で身に付くものではなく、日毎夜毎繰り返しの「打ち込み」を重ね続け、疲労困憊した極限状態の中で、ふと「これだ」とコツをつかむ一瞬がある。「抜重」のコツを知るのは、それほど至難の極みにある。打ち込みを避けて、一流の技を極めることは不可能である。今後、このことを理解し、実践するようにならないければ、仏柔道界の競技力向上は厳しい状況に陥るであろうと考えている。

次に、初心者に「背負投」を指導する日本人指導者が多く見受けられる理由への説明については、「適切な指導法ではないと考えていること、『足技』の基本である『出足払』から教えるのが良い」との考え方を示した。特に低年齢層にとって、「『背負投』は肘、肩、腰への負担が大きく傷害の危険性が高いこと、施技する際に体全体を回転させることから『体捌き』『足捌き』『肘の動作』が高度で複雑な技であり、導入期に適した技とは言えない」と自論を述べた。初期段階で、「背負投」から教える日本人指導者が多い理由として、「古くからの『慣習的な要素』が強いこと」、また、「一般的に日本人にとって柔道を代表する技は『背負投』とのイメージが強く残っていることから、伝統的に指導しているだけで明確な根拠はなく、日本柔道界の課題の一つである」と説明した。

FFJDAの子供たちを対象にした「遊び方」を取り入れたトレーニング方法は、工夫が凝らされユニークで、低年齢層が興味関心を惹く多彩な方法が確立（FFJDA，2014）され、日本ではあまり見られない「子供向け指導法」が定着している。カドや他の仏柔道家から、「『遊び方・トレーニング法』の知識を学び、FFJDA方式を導入すれば

日本柔道の発展に資するであろう」との助言を受け、大いに共感させられた。

また、日本の講習会は『『打ち込み』の後に決まって『乱取』を長時間やらせるだけで内容が単調過ぎないか』と質問され、さらに「技の研究や指導者による技の解説がほとんどなく、練習内容に工夫が足りない」と指摘された。日本人柔道家は、これらの助言を真摯に受け止め、徐々ながらも修正していく必要があると考える。

カドは、「日本の武道、芸道では稽古の上達過程を示す『守破離』^{*5}の理念で、基本技術に重点を置いた指導法が成されている（藤堂, 2007）が、仏人には『守』を大切にする文化はさほどない。また、「仏の子供は『型』にはめられるのを嫌がり、自分でやりたい技や掛け方を見つける」と語り、自主性と個性を尊重した指導法の重要性を説いた。さらに、「日本人の大切なことは『柔道のこと』、仏人の大切なことは『子供のこと』」と日本の指導法に異議を唱えた。これらの指摘を全て鵜呑みにする必要はないが、通り一辺倒の稽古内容は改善すべきである。山口（上掲書）も「仏など海外の事例に目を向けるべき時期にきている」と述べており、一考に値する指摘である。筆者は子供の指導法に関する違いは、文化や価値観の相違が起因していると考え、日本の指導者は年齢や個々の能力を考慮し、効果的でかつ対象者にとって楽しく動ける指導法を研究する必要がある。

IJFの要人であるジェーン・ブリッジら二大巨頭が参加したことから、EJUの将来の方針として「文武両道」の理念・文言を新たな柔道教育として導入し、ヨーロッパを起点に普及・浸透させる意図が窺取され、競技力偏重傾向への危惧感が見られ、日仏のみならず、国際的に「文武両道」が将来の柔道の重要なテーマであることが示唆され、シンポジウムの意義を再認識させられた。

嘉納の「精力善用」「自他共栄」の根本理念が文字通り漢字のままで世界に受容された（山下・小林, 2009）ように、近い将来「文武両道」の言

辞が柔道用語として海外に伝播することが予測される。古来より日本人に深く浸透し重用されてきた教育理念が、諸外国に受容されることを推測すれば、新たな矜持が沸き起こるが、柔道発祥国の日本としては、他国に先んじて「文武両道」に取り組まなければならない。

5 まとめ

7日間と短い滞在期間であったが、今回が筆者にとって4度目の講習会であり、親交も深く本音で議論を交わせる多くの柔道家が参加していた。海外柔道家たちの日本柔道への強い憧れ、期待の強さを改めて認識させられた。「国際化の波に揺らぐ日本柔道」との厳しい批判も聞こえてくる（松原, 2006）が、先人が遺した日本柔道の歴史と技、功績は世界の範として、確固たる文化として伝播・受容され基盤に揺るぎはない。英国を代表するジャーナリストで柔道9段のトレバー・レゲットは、「日本人は武道の精神も含めて、自国の文化を改めて見直すようになってきた」と述べている（田中・藤堂ら, 上掲書）が、当に今「原点回帰」の時にあり、競技柔道に偏り過ぎてはならない。諸外国の柔道家が抱く日本柔道への強い信頼を持続、継続させていくためには、日本の伝統文化の継承に価値を置いた取り組みが必要である。

カド（2015）は「武道・柔道は日本が生み、育んだ貴重なものであり、日本から世界へのプレゼントだ」と強いリスペクトを込めて述べ、その真意は「日本の若者よ、世界に出でよ」とのメッセージが秘められていて、海外雄飛を志す若き日本人柔道家たちの輩出を期待していることが窺える。地球規模で拡大する柔道界のイニシアチブを日本柔道界が持続していくために、後進の育成指針として求められる条件は、高度な柔道技術や秀逸な「形」の修得、幅広い教養、語学力、多様性に富んだ柔道家の輩出である。これらの条件を満たした若き柔道家の育成のために、日本人指導者は努力し続けなければならない。一方で、仏柔道

家から指摘された講習会等への提言や子供の指導法、「形」軽視の問題など、改善を求められる知見も浮き彫り化され、再考を試みる必要がある。

海外指導での問題点や課題は尽きないが、嘉納が目指した柔道は日本人としての誇りを固持し、その魅力を発信しようと国際社会の文化摩擦や課題・難問に果敢に挑戦する柔道家の輩出であったこと（百鬼，2017）を忘れてはならない。日本人により生み出された身体運動文化である柔道（藤堂，上掲書）を通じて、グローバルリーダーシップを発揮し、国際社会に貢献することは日本柔道界の使命である。

末筆ながら、願わくは国立大学に在って、我が国で唯一無二の武道課程を有する本学だからこそ、世界の柔道界が待ち望み、その期待に応えられる人材の輩出を願って止まない。

※1 柔道の練習には「形」「乱取」「講義」「問答」があり、「問答」は師匠と修行者との質疑応答（講道館，1995）。

※2 投技において、相手を力づくで投げるのではなく、たくみに相手を崩し（崩し）、自分の体をさばき（作り）、合理的に技を掛け（掛け）て投げることを技の理合いという（本村，上掲書）。

※3 講道館七種の「形」は、「投」「固」「柔」「極」「講道館護身術」「五」「古式」で（講道館，上掲書）、施技合計数は111本。

※4 自分の足もとをよく見るべきこと。他に対して意見を述べる前に、まず自分のことを戒めなければならないことのたとえ。「脚下」は、足もと。「照顧」は、反省してよく確かめること（田部井，2004）。

※5 日本の芸ごとの習得過程を示した理念で、第1段階は基本的所作（身体表現）を正確に行えるようになること。第2段階はその基本をふまえて自由で個性的な応用を考えること、第3段階は元の精神を尊重しながらも、その形を離れた自在な技を表現することをいう。

江戸時代中期の茶人・川上不白が『不白筆記』に著した（寒川，上掲書：藤堂，村田，上掲書）。

参考文献

- 朝飛大（2019）近代柔道41. 11：64.
- カドー・イヴ，編著者，石坂友司，小澤考人（2015）オリンピックが生み出す愛国心 スポーツ・ナショナルリズムの視点.（株）かもがわ出版：京都，pp. 228-229.
- FFJDA，<https://www.ffjudo.com/judo-etc>. 2019. 8. 31取得.
- FFJDA，<https://www.ffjudo.com/la-federation-en-chiffres>. 2019. 8. 31取得.
- FFJDA（2014）METHODE PEDAGOGIQUE JUDO. 4Trainer Editions：Paris，pp. 1-70.
- 濱田初幸（2006）柔道大国・フランスの実態を探る. 鹿屋体育大学学術研究紀要34：60.
- 濱田初幸（2011）柔道を探る 一武道必修化とグローバル化時代を迎えて一. 国立大学法人鹿屋体育大学：p40.
- 濱田初幸（2012）ヨーロッパ柔道連盟公認指導者資格制度・「The European Judo Union Coaching Awards Level 4 and 5」の指導を終えて. 鹿屋体育大学学術研究紀要45：34.
- 濱田初幸（2013）フランス・マルセイユにおける海外武道実習 一柔道専攻ゼミ学生を対象に一. 鹿屋体育大学学術研究紀要47：39-44.
- 濱田初幸，Yves CADOT（2015）フランスの柔道指導者資格制度を考える. 武道学研究48. 2：89-112.
- 濱田初幸，藤田英二，北村尚浩，前田明，久保山和彦，河鱈一彦，田村篤敬，高橋進（2015）フランス人柔道修行者の柔道に対する意識構造について. 武道学研究48：58.
- 濱田初幸，Jean-Michel Lévêque（2017）南フランス地方の柔道実態と特徴的プロジェクト：マルセイユ市を拠点に. 鹿屋体育大学学術研究紀要55：38.

- 長谷川優, 竹内外夫, 湯浅景元, 樋口憲生, 加納明彦 (1985) 柔道投げ技における床反力と動作の分析. 武道学研究17. 1: 45-46.
- 星野映 (2019) 1940-1944年の占領期パリにおける柔道の確立・フランス柔術クラブの活動を中心に. 体育学研究64: 195.
- 池田哲雄 (2020) 近代柔道42. 2: 67.
- 井上俊 (2004) 武道の誕生. (株)吉川弘文館: 東京, p187.
- 石井孝法 (2019) 近代柔道41. 11: 38.
- 石田吉三 (1915) 柔道. 柔道會本部事務所. 東京堂: 東京, 第2號. p68.
- 柔道大辞典編集委員会 (1999) 柔道大辞典. (株)アテネ書房: 東京, p403.
- 上掲書. 211.
- 柏山徳輝, 吉田勇生, 沖和久 (2019) 日本武道学会第52回大会研究発表抄録: 87.
- 柏崎克彦 (2008) 近代柔道30. 11: 56-57.
- 木村秀和 (2007) 近代柔道29. 5: 122-123.
- 公益財団法人 笹川スポーツ財団 (2017) 中央競技団体現況調査 報告書: p152.
- 講道館 (1995) 決定版 講道館柔道. (株)講談社インターナショナル: 東京, pp. 30-31.
- 正木照夫 (2019) 近代柔道41. 10: 42.
- 松原隆一郎 (2006) 日本の<現代>17武道を生きる. (株)NTT 出版: 東京, pp. 76-78.
- 溝口紀子 (2015) 日本柔道 フランスの JUDO. (株)高文研: 東京, p51.
- 本村清人 (2003) 新しい柔道の授業シリーズ. (株)大修館: 東京, p165.
- 上掲書. p16.
- 百鬼史訓 (2017) 柔道. 88. 3: 4.
- 文部科学法令研究会 平成27年版 (2015) 文部科学法令要覧. (株)ぎょうせい: 東京, p7.
- 村田直樹 (2011) 柔道の国際化. (財)日本武道館: 東京, p529.
- 中村良三 (1984) 柔道の国際化への対応, 大滝忠夫監修, 竹内善徳, 杉山重利, 手塚政孝, 高橋邦郎編著. 論説 柔道. (株)不昧堂: 東京, pp. 278-280.
- 野瀬清喜 (2008) 柔道学の見方. (株)文化工房: 東京, p159.
- 野瀬清喜 (2018) 柔道. 89. 11: 4.
- 酒井重義 (2016) 近代柔道38. 11: 54-55.
- 鮫島元成 (2019) 柔道. 90. 10: 7.
- 寒川恒夫 (2014) 日本武道と東洋思想. (株)平凡社: 東京, pp. 28-36.
- 上掲書. pp. 122-125.
- ソリドーワル・マーヤ (2018) 津田塾大学. グローバル社会における柔道教育の在り方とこれからの課題を考える —日本とヨーロッパの実践を中心に—: p32.
- 鈴木貴士 (2019) 日本武道学会第52回大会研究発表抄録: p60.
- 田部井文雄 (2004) 大修館 四字熟語辞典. (株)大修館書店: 東京, p96.
- 高木勇夫 (2010) 海を渡った柔術と柔道. (株)青弓社: 東京, p135.
- 瀧本誠 (2011) 柔道 金メダリストの技. ベースボール・マガジン社: 東京, p4.
- 田中守, 藤堂良明, 東憲一, 村田直樹 (2001) 武道を知る. (株)不昧堂出版: 東京, p181.
- 上掲書. p23.
- 上掲書. p170.
- 藤堂良明, 村田直樹 (2019) 21世紀の柔道論. (株)国書刊行会: 東京, p167.
- 上掲書. p181.
- 藤堂良明 (2007) 柔道の歴史と文化. (株)不昧堂出版: 東京, pp. 83-84.
- 上掲書. p196.
- 上掲書. p3.
- 上掲書. pp. 165-166.
- 上村春樹 (2019) PARK24 GROUP presents 2019 世界柔道選手権東京大会プログラム: p13.
- 山口香 (2013) 日本柔道の論点. (株)イースト・プレス: 東京, p6.
- 上掲書. p188.
- 山下泰裕 (2019) 近代柔道41. 10: 38.

- 山下泰裕・小林和男（2009）プーチンと柔道の心. 朝日新聞出版社：東京, pp. 14-24.
- 読売新聞（2019）6. 27付け.
- 全日本柔道連盟. <https://www.judo.or.jp/wp-content/uploads/2019/04/tourokujinkousuii2019.pdf>. 2019. 8. 31取得.